批評

古代に於ける東西交通に關する近著

H. G. Rawlinson, Intercourse between India and the Western World from the Earliest Times to the Fall of Rome. Cambridge University Press 1916

文學博士　坂口昂

本題に對して余の考察し得たる限り二個の出版が尤も推奬に價すると思ふ、即ちショッフ譯註『エリツラ海案内』W. H. Schoff, the Periplus of the Erythraean Sea, translated and annotated. London, Bombay and Calcutta 1912 と、表題に掲げた通りローリンソン著『印度と西方世界との交通』とである。エリツラ海とは、紅海から出發するにしても波斯灣から出發するにしても、アラビヤ半島の外洋の古名であつて、先づ印度洋と解して差支ない、エリツラとは赤色の義である

前者はフイラデルフイヤ通商博物館（コンメルシヤルミユゼアム）の今古東西の交通史編纂の企圖に促されて、その秘書たる前記ショッフが試みたる事業で、かの十九世紀初のウイリヤム、キンセント Vincent 以來、屢現はれたる『エリツラ海案内』に關する研究の絶頂點を形作つて居るやうである。本文は全世界に平和を與へた羅馬帝國の初期、恐らくば皇帝チロの治世紀元後六〇頃におけるアレクサンドリヤの或る希臘人の實歴に基いて物されたものらしい。この紅海から印度への航路、及び沿道の諸港の有樣から支那 Thin of This 貿易に至るまでの報道が、その簡明なる原本相當に、約三十頁未滿に英譯され、

之が前置として約二十頁の序說と、後附として約二百四十五頁の紙幅が細字を以て挿畫附の註解考證とが添へられて居るは、如何にも親切なる拵方で斯界の祝福である。

この者は數年前の公行にかゝり或は既に世人の知る所となつて居るであらふと思はれるが、後者ローリンソンは最近に、實に昨年出版せられ、且つ前者よりも普遍的性質を有し、より多く東西史家並に一般讀者の傾向に好適するものと信ぜらるゝが故に、茲に先づこれが內容を紹介したる後に之を批評する。

本書は最古より羅馬衰亡（紀元後約六世紀）まで印度と西方、殊に希臘羅馬世界との交通をモノグラフ體に八章百九十六頁に叙述して居る一小著であつて、挿畫四葉、地圖一葉添ふて居る。本書の目的は主としてひろく印度に關する希臘羅馬の典籍を引用して印度史の不明なる點並に東西交通を闡明するに在る、隨て著者の自白する通り、マックリンヅル（McCrindle）の印度に關する古代西方人の著書の翻譯六卷を利用し、その外に是等の原本に據り、且つ間々印度の典籍及び西方亞細亞の金石文や埃及のバビリをも引いて居る。著者はボンベイ附近、プーナPoonaに於けるデッカン大學の英語教師にして、既にBactra, the History of a Forgotten Empire, 1912 や Indian Historical Studies 等の著書もあることであつて、現に本書の緒言も 1916 Poona に於て書かれて居る。

第一章「最古の時よりバビロン滅亡まで」は先づ印度と西方との交通の頗る古きことを說いて居る。著者は最古の跡方を、キンクレルの研究に據り、小亞細亞に於けるミタニのヒタ（Hittite）王の金石文に求め、その內に Indra, Mitra, Varuna, Nasatya てふヱーダ中の諸神名が記載されたると

を指摘し、よしや他の從來の學者と同じく其間に何等具體的連絡を證示し得ざるも、小亞細亞の住民と五大河地方に住するエーダ時代のアリヤ人との或る關係の所在をほのめかして居る。次に印度 *Sindhu* (G. K. Sindon, Arab, Sitin; Hebr. Sadin といふ名稱が印度の綿といふ元來の意味にてアッシリヤのアッシュルバニバル（紀元前六六八—六二八）の文庫中に於て發見されたこと等の事實に對して、著者はリグ・エーダを以て對照さして、印度人が古來經驗に富める大膽なる海員なりしことを說き、之と連關して西方からの交通者としてフエニキヤ人の波斯灣への出動を紹介し、ベロソス Berosos に據つて、バビロンが「諸種の人民の來住するところである、彼等はカルデヤの國に住し各自勝手氣儘なる生活の方法を取つて住み暮らして居る」と引用し、この大都會の市場に於て、イオニヤの商人も、本國から拉し囚はれた猶太人も、フエニキヤ商人も、五大河地方から商品を賣るために來る印度人も茲に落ち合つて居たと推定して居る。

本章の終に、古代に於て商品として印度の物產にして西方に傳はつた物及びその名が提議されて居る。これは固よりラッセンに依據したもので、新發見でもなく、加ふるに爾來言語學上の進步もあり、一概に信ずべかるざるものあるやうであるが、一般文獻に志ある人の參考までに、その若干を示せば、前記の綿の外に次の如きものがある。

象…Sansk. *Ibhadanta* (Gk. Eleph nt. El = A·ab. article)

錫… 〃 *Kastira* (Gk. Kassiteros. ∴ Cassiterides錫嶋)

米…Tamil *Arisi* (Aras.Aruz; Gk. Oruza; Eng. Rice)

胡椒… 〃 *Pippali* (Gk. Pepe i; Engl. Pepper)

此外に文字傳說天文建築の影響又は傳播に關する蓋然を說きたるも極めて簡單にして論證を缺く。

第二章「波斯時代　ヘロドトス　クテシアス」は主として章名の示す兩典籍、殊にヘロドトスによつてダリウス大王がインドス及び印度洋航路の探險に使用したといふ希臘人（寧ろカリヤ人）Skylax of Karyanda の事、及び波斯が印度の沙金徵收の事を說いて居る。

第三章「マウリヤ帝國　メガスデネス」は先づ千古の風雲兒にして天才たるアレクサンドル大王の東征の結果、夙にバニニ中に現はれたヤワナ（Yavana i.e. Ionia）、即ち希臘人がこゝにインドス河畔に尤も活潑に動靜來往し、並に彼等の都市が同地方に創立され、その內には盛大なるものありしことを高唱して居る。就中印度史料による Alasanda on the Yonas (Mahavansa, transl. by Turnnour, XXIX)と西方史料による Alexandria-on-Indus (Arrian, Alexander VI. 14) との同一なることを說明し、大王の死後チャンドラグプタが五大河地方を根據として風雲を捲き起し、遂にマガダを亡ぼして自らマウリヤ朝の大版圖を創立したのは、彼が少時親しく接觸したアレキサンドルからその帝國策の感化を受けたることなきやと揣摩し、マケドニヤ人の五大河地方に於ける支配は大王の死後十年の內に終りたるも、所謂ヤワナ植民の或る多數なる團體は前記の盛大なる首府アラサンダを始め、その他の希臘植民市に留り、極東に於けるヘレニズムの命脈を繫ぎたることを說き又たシリヤ王國の始祖セロイコス一世の使節メガステネスがチャンドラグプタの朝廷に滯在して「印度事情（インディカ）」の報道を齎らし歸つたことは世界周知の事實なるが、その外に同じ君主がその後 Demachos をチャンドラグプタの子ビンヅサラの朝廷に、尙ほ又たプトレミ二世がデオニソスを印度

に派遣したることをも指摘して居る。而して本章が、前記の始めて印度の中心まで大旅行を遂げたメガステネスのマウリヤ王朝の大帝國觀察を、主として紹介して居るものなること(四〇—六四頁)は勿論である。

第三章　「五大河地方に於ける希臘及び半希臘王朝」は先づ中央亞細亞に於ける諸方交通の衝點たるバクトラの重大なることを力說し、この地に紀元前約二五〇年頃シリヤの支配から獨立して希臘人ディオドトス Diodotos 及びそれ以後の希臘人の王國が出來たこと、この間にマウリヤ帝國がチャンヅラグプタの孫阿育王(紀元前二三二死)の統一の後で分裂衰弱したに乘じ、有力なるバクトラ支配者希臘人ユウチデモス、殊にその子デメツトリオス Euthydemos, Demetrios が紀元前一九〇—一八〇間に南下して五大河地方を略し、更に下りて海口に達し、前章既述希臘殖民の殘たるアラサンダ等を併合したること。然るにこの紀元前二世紀の中葉以後、大月氏族の壓迫は塞外のスキテン(サカ族等)族の前進南下となり、希臘人のバクトラ及び五大河地方に於ける支配を困難にしたに拘はらず、前記ユウチデモスの子孫の內にメナンドロス(Menandro)出でゝ希臘人の支配中興し、一時は遠くマガダの都パタリプトラ(パトナ)の城下まで恒河畔をふかく侵入した大征服家にして、デメツトリオスと同じく五大河地方の都サガラの王位に昇り佛法に歸依し尊者と崇められ、その都城の盛大はミリンダ經(Sacred Book of the East XXXI by Rhys-Davids)之を傳へたこと。されど紀元前一世紀には大月氏族はクーシャン部の統率の下に遂にバクツラ及び印度の或る大部分を征服統一し、その有力なる君主カニシカの時最も隆盛を極めたること。以上諸事項は東西史料の外に著者が Gardner, Rapson 等によつて希臘印度貨幣を根據として居ること勿論であつて、こゝに有

益なる貨幣寫眞一葉が挿むである。次に

第四章「プトレミ家」

が主として海上交通を說いて居るのは自然である當時この方面に於ける印度交通が直接に行はれた場合は頗る稀れであつた。然らば中次の港は何處なるか、それは Arabia Felix (or Eudaemon i. e. Felicity) 今のアデンであつた。この地猶ほ近代のポートサイドの如く東西物資の中次場であつた。當時直接に印度に航した人は稀有である。ストラボがメガステネス以上に推奬して居るアレクサンドリヤの學者エラトステネスの地理書中にある印度事情と雖も勿論傳聞に基いて居る。Eudoxos of Cyz. cos は前記稀有の例である。プトレミ、エウエルゲテス二世（紀元前一四六—一一七）の時、紅海の入口に漂著した印度船があつた。この事埃及官吏の報告があつたから、生殘の印度人はアレキサンドリヤに招き寄せられた。大膽なる海員エウドクソスはこゝに王の依囑によりこの印度人を案內として前後二回印度に直航して珍貴なる東洋物產を澤山船積して歸つた。又た彼は歸途亞弗利加の東海岸で發見した難破船の舳先が西方の船、フエニヤ船のものたることを知つたから、因てジブラルタを出で大西洋から亞弗利加廻航を企てたと報道されて居る（S rabo II. 3.4.）。

第六及七章「印度と羅馬帝國」

「羅馬の平和（パックス・ローナマ）」は滿天下を一家化したから極東との交通はパルチヤの確立によれる塞梗に拘はらず以前よりも促進され、殊に海上に於て活潑となつたらしい。アウグスツスの即位は遙る〳〵印度から、その六百の諸王に君臨すてふ大王 Porus (or Pandion) の祝賀使節を惹きつけた。これは紀元前二五年本國を出發し、珍獸その他の大層な方物を齎らして途上四ケ年を費して居るから、恐らくば陸路によつたものであらふ。この大王はかの有名

なるカニシカを出した大月氏王朝に引き當てるとその始祖、カッフイセス Kadphises 一世に相當する。尙ほ紀元後九九年頃皇帝トラヤーヌス即位の初に第二の印度使節が祝賀を述べに來た。それはカッフイセス二世即ちカニシカの發したものと推定される。これらの兩使節の來た期間に、西方からの東方海路交通に一大革命が起つて居る、それは羅馬三代皇帝クラウデウスの時、紀元後四五年船長ヒッパロス Hippalos といふものが印度洋上の貿易風を發見利用することになつたことである。この風は恐らくばアラブ人から聞知したことであらうが、西方ではともかく所謂發見者の名を以て呼ばれて居る。之によつて西方人は從來行はれて居つた沿岸を縫ふてゆく遲々たる航海法を捨てゝ夏季貿易風の吹く時に大海に出でゝ從來よりも迅速に印度に直航する方法を取ることになつた。紅海の入口から印度の Muziris (Cranganore on the Malabar Coast) まで四十日で達するから、アレキサンドリヤから紅海の入口までの約一ケ月を加へると、約二ケ月少し以上で東西の交通が出來ることになつた (Plinius VI.26. Periplus 56. 57.)

著者はプリニウスに據り、贅澤な羅馬人の東洋品需用の切なること、之と同樣に印度人殊に南方印度人の羅馬貨幣を慾求することに因つて東西貿易の成立を指摘し、殊に冒頭に紹介した『エリツラ海案内』に據りて東方海路及諸港の事を可なり詳細に報道して十頁餘を充してゝ居る。

著者は進みてプトレミの地理書の報道に據りて恒河のデルタ、イラワデのデルタ並に馬來半島 (Golden Chersonesos)、馬來群島、印度支那に關する知識を說き、次にプトレミ(紀元後二世紀)よりコスマス「印度航海者」(インヂコプレウスステス) Cosmas Indicopleustes の Christian Tophgraphy (紀元後六世紀)に至るまでの四世紀間の印度報道は率ね基督敎傳道師の報道

を基とするものなることを概說し、その主要なるものとして Clement of Alexandria + 220A.D. と Bardesanes とを擧げて居る。前者は彼の師 Pantaenus といふ最古の印度布敎師の一人の報道に基くもので、始めて卒塔婆のことを記し、殊に從來メガステネスの報道以來明確でなかつた佛敎徒と婆羅門敎徒との區別を始めて嚴重にしたのである。後者バルデサネスはバビロン人であつて、かのエラガバロスといふシリヤの日神の祭司が帝位に昇つた時（紀元後二一八）そこへ祝賀に來た印度人 Sandanes なるものゝ報道に基き、希臘人の所謂裸學者（ジムノソフィスト）の事を傳へて居る。彼の原書は失はれたるも、その內容は克己（アプスヂネンシヤ）と物理（フィジカ）と題する二論文中にあるのであつて、實に支那の旅行者法顯よりも數世紀早く、印度に於ける佛敎の修道院及びその生活を說き、その內には當時佛敎思想が新プラトン派の發展に影響する所ありといふ推定を大に信ぜしむるに足るものがある。

第八章「印度と西方との交通の影響」

は以上概瞥したるモノグラフの結論である。著者は、第一、アレクサンドル大王以前、希臘人の印度交通及び印度知識が概して間接であつて、偉大なる古代印度文明につきて彼等は殆んど之を知らず、又た知らんと欲しなかつたとし、よしや文字曆、度量衡、傳說につきて西方亞細亞に於ける古代文化からの影響は或る程度まで有り得べく考へられるとしても、ピユタゴラスや、オルフオイスや、プラトンの思想が印度の古き思想と類似近接して居るといふ事に關して、直接一方から他方に傳播攝取されたことは毛頭これなしとて、Burnet の 'Every thing points to the conclusion that Indian philosophy came from Greece.' を全然否定し、第二、ヘレニズム時代に入りて印度交通始めて直接となつた、しかしマウリヤ朝の大帝國は

大體に於て希臘思想に影響されない、只だその分裂後、スキテン及び大月氏の壓迫の加はつたと共に南下したバクトラの希臘人及びその生活が、いかばかり西北印度文明を影響したかゞ、尤も面白き問題である。著者はこの點に於て再び印度希臘貨幣を引合に出し、且つ東方化した希臘語がスキテン、大月氏及び印度人間の國際語即ち一種のリンガフランカを形作つたことを提示した。

然らば東西相互の影響は終に如何、著者は貨幣鑄造が全然希臘に習ひたるものなること、殊に南方印度が一歩を進めて羅馬貨幣そのまゝ利用といふ最便法に出たことを力說し、次にガンダラ美術に於て、希臘羅馬美術の印度へ輸入せらるゝといふ主要源泉が形作られたこと、しかしその技術はシリヤより輸入し、即ち古典美術のデカダン的のものであつて、殊にガンダラ美術の後期は古佛教美術との混和であり、而も紀元後四〇〇年頃に全然消滅して後者に代はらるといつて居る。文學學問につきては、大体に於て大なる影響なしとし、只だ劇は幾分か希臘に影響されたらしい、殊に天文に於てのみは、確かに西方輸入てふ確證がある。何となれば印度文學は希臘人を夷狄として卑むを常とするも、天文學には精通して居るから之れを神の如く尊敬すべしとして居、この點に於て西方にRomaka といふ有名なる市ありといふは是れ明かにアレクサンドリヤを指すもの、又印度に Paulisa Sidhanta とあるは是れ確かにPaul of Alexandria ca. 378 A. D.に基きたる天文學上の論文である。翻て東方から西方に及ぼしたる影響としては前記の如く新プラトン派は印度から或る感化を受けたらしく、隨て基督教會も亦た幾分の影響を感じたるなるべく、殊に西方の社會に幾多の東方物語の輸入のあつたことは勿論明瞭である。

以上は本書の内容からその主要點だけの紹介で

あるが一般讀者の理解に便にせんがために、紹介者は幾分か東西交通の背景を加筆した迄である。

一體本書の目次を一瞥して直觀し得るが如く、本著者は世界史の廣大なる背景につきて明確なる概念と顧慮とを缺いて居るやうである。殊に第三章マウリヤ朝、第四章五大何地方の希臘及び半希臘王朝、第五章プトレミの三章は、表題の取り方に於て憾がある、余は之をヘレニズムてふ東西交通の一大綱を擧げて然る後に分期併に分類すべきものであると考へる。然る時は一般讀者の理解は一層容易になりうるであらう。著者の歷史上智識に對して望ましき所ありといふことは、彼がセレウコス家の印度との關係を述ぶるに當り、Syrian family, Syrian monarch, Syrian Princess の如き不適當なる用語があるのを見て、推察出來る、セレウコス及びその一族はシャリ人にあらず、マケドニヤ人である、これは異國民の結婚や東西の社交關係を述ぶるに際して、特に力めて避けたき不注意である。

本書の叙述にところ〴〵明確を缺き、或は矛盾に陷るにあらずやと思はるゝ所がある。例へば著者がバクトラが交通上重大なる集散地なることを指摘し、猶ほアレクザンドリヤやコンスタンチノプルの如しと度々力說したのは頗る結構であつたが、九頁にそれが印度、支那、西方の三交通の焦點たることを指摘し、然るに六九頁はストラボン一五卷二、八に據りて、アフガニスタンを通りてバクツラに向つて集中する三道があるとし、尙ほその外にバクツラから支那へと西方へとの孔道ある事を示して居るのは前記事と不一致の嫌がある之を余の手許にあるランゲンシャイト譯本に據るに、前記引用の所にも一一卷八章九節にも單にバクツラから三道分れ出るとある。然らば九頁の書き方が寧ろ正當であつて、六九頁のは頗る曖昧多岐で疑はしく思はれる。少くともこの點は疑雲の

闡明を要するものがあるのではなからふか。又一〇九頁「トラヤーヌスの許へカッフイセス二世の使節が紀元後九九年に來た、時に(When)トラヤーヌスのメソポタミヤ征服は印度と羅馬の境とを正しく六百哩に過ぎない距離に接近せしめて居る(had brought)」とあるが、これもその記述曖昧で、文法通りに解すると事實の錯誤とならざるを得ない。何となれば、著者も引用するなるカッシウス、ディオの本文(四〇八、一五)に據ると、當時トラヤーヌスはゲルマニヤに在つて皇帝(九八―一一七年)にあげられてから都に歸著した、その時に印度使節が到來した、されば、成程これを紀元後九九年として居るのは大體妥當である、しかしそのつゞきに本引用者の構說するが如き用語がある以上、トラヤーヌスがミソポタミヤを征服し了りて羅馬の鷲幟が波斯灣頭に翻り、西國の境界が著しく近接したから、それで始めて印度使節が來ることになつたと讀解されなければならぬことになる。然るに歷史上明瞭なる事實はメソポタミヤ遠征がトラヤーヌスの晩年實に紀元後一一四―一一六年であるのである。

尙ほ一つ注意する。右の羅馬帝國時代の印度使節のことは可なり鄭重に報道されて居る、然るにヘレニズム時代マウリヤ朝の時阿育王のヨナカ、即ち希臘風世界の諸國に對する佛敎傳道使節派遣の事が、よしやその結果が不明であるにしても、少くとも同樣の程度に取扱はるべき價値ある筈であるに只だ Asoka sends, missionaries to his Greek Neighbours; といふ數語で葬られて居る。

しかしながら本書は、既述の如く、主として西方の史科に據り、尙ほ若干の東方史科をも參照し且つ著者が印度在住といふ特有の位置、不便もあらうが便益も尠からざるべき境遇に跨り、古代に於ける東西交通關係を一括して簡約に敍說したも

のであつて、その間、別段新しい考証も議論も鮮いやうでもあり、尙ほ又た前記の如く多少の遺憾の點をも伴ふて居るにも拘はらず、大體に於て英語にては同樣の近業の內、稀に覩る纏りの附いた小著作である。隨て一は古代印度に興味を有する者のために、他はヘレニズム研究家のために頗る面白く且つ有益なる好著たるを失はない、因て古代に於ける東西交通に關する近著として冒頭既記のショッフ譯註『エリッラ海案內』と共に、併せて之を江湖に紹介する。

（完）

『鎌倉武士と禪』　鷲尾順敬著

大正五年十一月發行（三五版二七九頁）

文學博士　三浦周行

本問題を取扱つたものは是迄にも少いとはせぬが、本書は日本佛敎史家たる著者の手に成つたものであるだけ、讀者の注意を惹くこと多かるべきは言ふ迄もあるまい。余輩は鎌倉時代の禪宗を廣い佛敎史の見地から徹底的に說明した良書として本書を江湖に推奬するに躊躇せぬ。

さり乍ら最初の一二章を讀んで居る間こそ「我國の佛敎の文化史的研究に依り國民の思想傾向の一面を觀察せんとし、本書の結構を試みた」との著者の用意に首肯づかれるけれども、それから後は主として鎌倉時代の重もなる禪僧と其檀越であつた一二の北條執權との傳記的記述に傾いて居る。尤其間には禪宗の成立傳來乃至其制度等の說明も交へられて居るとはいへ、著者が最初に高唱した新時代の新氣運に當つて國民の精神的衝動としての新興佛敎の說明としては聊か物足らぬ感がないではない。余輩は本書に結論がないからと言つて別に慊らず思ふものでもない、南宗禪宗の國家的意義が此時代の武士に刺擊を與へたことが本書